第二回リレー小説「梅雨」赤組一番手

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　阿笠多名

「しとしと」

隣でなにやら呟いているのは，僕の友達の雫だ。

昨日から降り始めた雨は今日になってもやむことなく降り続いている。  
「雨やまないかな」  
　雫が窓の外を見ながら憂鬱そうにしていた。  
「当分やみそうにないよ」  
　僕はスマートフォンで天気予報を確認しながら言った。  
「ねえ、私いつまでここにいていいの」  
　雫は遠慮がちに僕に尋ねた。  
「好きなだけここにいるといいさ」  
「ありがとう」  
　雫は申し訳無さそうに僕にお礼を言った。  
  
　雫が僕の部屋に来たのは，おとといの夜だった。僕がパソコンに向かってレポートを格闘しているときに、玄関のチャイムが鳴った。  
　ドアを開けて、そこに立っていたのが雫だった。  
　雫は高校の同級生で，僕と雫は大学進学後も定期的に連絡を取り合っていた。  
　僕は雫を部屋の中に入れ，実家から送られてきたアセロラジュースを雫に渡した。

「おいしい」

雫はよほど気にいったのか，アセロラジュースを三杯もおかわりした。

「ねむいぴょん」

雫の発する言葉の語尾が変化した。これは雫が本当に眠い時に発する変化だ。

「おやすみぴょんぴょん」

僕は彼女の一歩先を行く語尾で返答して，その日は眠りについた。

「おはよう」

朝起きると，雫が台所でご飯を作っていた。

「冷蔵庫にあるもので適当に作ったよ」

適当と言いながらも，彼女の料理は僕の作る料理の何倍もおいしかった。

「今日も学校に行っちゃうの」

彼女が僕に尋ねた。

「今日は図書館に行くよ」

「そっか。気をつけてね」

彼女が僕の身を案じてくれたので，僕は細心の注意を払って図書館に向かった。

僕の住んでいる地域の図書館は最近できたばかりだ。

世界的にも有名な建築士が設計を手がけたらしく、全国ニュースでもこの図書館は取りあげられていた。

僕は人が少ない閲覧席に向かうと，部屋から持ってきた本を読み始めた。別に自分の部屋で本を読んでもよかったのだが，雫のいる部屋よりも図書館の方が集中できそうだったので，わざわざ足を運んだのだ。

一時間ほどで本を読み終えると，おなかがすいてきたので近くにあるラーメン屋に向かった。

坦々麺を注文して待っていると，スマートフォンが鳴りだした。

「もしもし」

「寂しいから早く帰ってきて」

「坦々麺食べ終わったら帰るよ」

僕は淡々と雫に告げて，坦々麺が運ばれてくるのを待った。

「お待たせしやした」

僕の目の前においしそうな坦々麺が現れた。

「いただきやす」

僕も店員のように関西弁風になりながら坦々麺を食べ進めた。

「ただいま」

坦々麺を食べ終えた僕はすぐに部屋に帰った。

「おかえり」

雫は部屋でなぜか開脚後転の練習をしていた。

僕は気にすることなく水道でうがいをし，風邪の予防に努めた。

「アセロラジュースもうないの」

うがい薬を冷蔵庫にしまっていると，雫が聞いてきた。

「ざくろジュースで我慢して」

僕は冷蔵庫からざくろジュースを取り出して雫に渡した。

「ざくろは好きじゃない」

雫は不満を言いながらも，ざくろジュースを口にした。

「すっぱい」

よほどすっぱかったのか，雫は近くにあったソースを口に流し込んでいた。

「やれやれ」

僕は雫の前にミネラルウォーターを起き，台所を後にした。

「ねぇ，明日どこか行かない」

テレビを見てくつろいでいると，雫が僕の膝に頭をのせてきた。

「そうだね，どっか行くか」

明日は特に用事がなく，それに久しぶりに晴れるそうなので，僕は雫と出かけることにした。

「どっか行きたい場所あるかな」

僕は彼女に尋ねた。

「変電所に行きたいな」

雫は僕の膝をくすぐりながら言った。

「いつから僕の彼女になったんだい」

僕はしびれを切らして彼女を問いただした。

「うあー」

雫はよく分からないことをつぶやいて，ソファーの上で眠り始めた。

「風邪引くぞ」

僕は雫にタオルケットをかけ，部屋の電気を消した。

翌日，僕たちは近くの映画館へ映画を見に行った。

その日はあいにく変電所が開いてなかったので，しょうがなく近くの映画館へと出かけたのだ。

席に座っていると，雫がポップコーンを買ってきてくれた。

「ありがとう」

僕はポップコーンを一つ受け取って，礼を言った。

映画館はそこそこ混んでおり，座席の三分の二ぐらいが人で埋まっていた。

まもなくすると上映が始まり，僕は映画の世界に入り込んだ。

「今日の映画楽しかったね」

どうやら雫は映画を満喫したようだ。

「途中で寝ちゃったからよく分からないや」

僕は途中から興味を失って眠ってしまったので，映画の内容はあんまり印象に残っていなかった。

「主人公がお好み焼きをうまくひっくり返せるようになったところは感動したな」

雫によると，お好み焼きがうまく作れない主人公が周囲の協力を得て，上手にお好み焼きが作れるようになるというストーリーだったそうだ。

正直僕はそのストーリーにあまり魅力を感じなかったが，今年出た映画の中では一番の観客動員数を記録したと，雫はニュースサイトで知ったようだ。

「せっかくだからピクニック行こうよ」

せっかくの意味がよく分からなかったが，僕たちは近くの高原へピクニックに向かった。

「あーいい気持ち」

僕たちはそよ風に吹かれながら高原の中を歩いた。

「明日からしばらく天気悪くなるみたいだね」

雫がぽつりと呟いた。

「まぁ，梅雨だからしょうがないよ」

「雨は好きじゃない」

「雨が好きな人なんてそういないさ」

「それもそうか」

そう言うと，雫は地面に転がっている石を思いっきり蹴飛ばした。石は思いのほか遠くまで飛んで，地面には石が存在していた跡だけが残った。

「雨が降れば，いずれこの石の跡もなくなっちゃうんだね」

雫が珍しく哲学的なことを言った。

「いつまでも跡が残るよりは消えてしまった方がいいこともあるよ」

僕も雫に合わせて哲学っぽいことを言った。

「ふおー」

雫が悲しそうに叫んだ。

「ふおー」

僕も雫に負けないように精一杯叫んだ。

だけど叫んだ後に残ったのは，どうしようもない悲しさだけだった。

雫と同じ言葉を発しても，僕と雫でその意味合いは違っていた。例えるなら，雫の「ふおー」は夕焼けで，僕の「ふおー」は朝焼けだ。

「ふおー」

僕も夕焼けのようになりたくて，雫を真似てもう一度叫んだ。

けれど僕の「ふおー」は決して夕焼けにはならず，より強い朝焼けとして世界を満たしていた。

「帰ろっか」

「うん」

僕たちはやって来た方向に引き返し，僕の部屋へと向かった。

「疲れたー」

雫は部屋に帰るやいなやソファーに倒れこんだ。

「ちゃんと外から帰ったら手洗いうがいをしなきゃだめだよ」

僕は石鹸で手を洗いながら雫に注意を促す。

「くーん」

雫がかわいらしい声で鳴いた。

でも，そこには「ふおー」のような強さは見当たらなかった。

僕はそれが悲しくて，いつもより入念に手を洗った。

「いつまで洗ってるの」

雫の声が聞こえた。

「もうすぐ洗い終わるよ」

僕は蛇口を閉め，ぬれた手をおろしたてのタオルで拭いた。

僕は雫の隣に座ると，ずっと気になっていたことを尋ねた。

「雫が僕の部屋に来た理由を教えてくれないか」

雫は少しだけ驚いたような目でこっちを見たが，やがて覚悟を決めたように口を開いた。

「いいよ」

僕はテレビの電源を消して，雫に向き直った。

さっき降り出した雨の音が僕たちを包みこんでいた。